

---

# おひさまsummer

詩代 歩溜

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

おひさまsummer

### 【NZコード】

NZ909N

### 【作者名】

詩代 歩溜

### 【あらすじ】

13回目の夏をむかえようとしていた千歳。

いろいろあって、孤独だと感じることが多くなつていたある日のこと。

「ぴーなっつ」

わけのわからない声と共に謎の人物が現れた。この人が千歳の人生を大きく変える。

人と向き合つことをやめた千歳がどんどん人と接していく・・・。

## プロローグ（前書き）

大切な人と過ごす夏。

1秒でもいいから一緒にいたいんだ。

1秒じゃたりないんだけどね。

プロローグ

太陽出てるね。

今日は歴のはずなのに。

天氣予報士さん殘念。

でも私は嬉しいな。

「 昨日は + 明日は雨なんだ。」 「 つてすごいがつかりだつたのに。」

今、晴れてこんなに嬉しいのって天気予報を外してくれたおかげ  
じゃないかな。

天気予報ありがとうございます！

まあ、でも、晴れだからって何かあるわけじゃないんだけどね。

お空の上で喜んでるあなたを想つて私が勝手に喜んでるだけだよ。

きっと今日はいい日だよ！

「コースの占いでは『最悪だつたけどね。』



## プロローグ（後書き）

文法の誤りや、おかしいところなどあつたらお手数ですが教えてください（^▽^）  
これからも続けるので、よろしくお願いします。

## lost father

「いってきます。」

その言葉に對しての返事はない。前までは、「いってらっしゃい。」の声が聞こえないと部屋中捲しまわって家族を見つけて、無理矢理言わせてた。けど今はそんなことしたって時間の無駄。だつて誰もいないもん。いつからだろ?お母さんが帰つてこなくなっちゃつたの。最初は寂しかつた。去年・・・だから、中1までお母さんと一緒に寝てた私が、今はベッドに一人どころか家の中に一人だよ。不安で仕方なかつた。ま、それも最初だけ。今は慣れっこだ。そつか、あれは1年くらい前のこと。

- - -

「お母さんー私、13歳になつた記念に一人で寝るー。」

私は自信満々に言つた。それもドヤ顔で。でもお母さんは、  
「そう、これで広々寝れるね。」

と、このひとことしか言わなかつた。この時は向とも思わなかつたんだ。

3ヶ月後・・・

お父さんが、仕事から帰つてくるなつて言つた。

「転勤が決まつた。だから・・・離婚してくれ。」

その時20時で私とお母さんは夕飯を食べていた。お父さんの分もちゃんとあった。

「本気?なんの[冗談]?今日はエイプリルフールといりますよ。」

茶化すように私が言つたらなぜか怒られた。え?え?なんで私怒られたのかな?

「・・・分かった。」

はい?分かった? a11 「お母さん?イヤイヤ、我全然分からない。お母さんは何が分かったの?離婚だよ?離れ離れだよ?訳が分からないよ・・・。

「お母さん!お父さん!なんなの?説明してください。」

私が説明するよう催促すると、お母さんがクリップでつままれたよう開きずらそうな唇を開けて説明してくれた。

「あのね、お父さんはね、私たち以外に大切な人がいるんだって。だから、私達は離れなきや<sup>ちとせ</sup>いけないの。一緒にいちゃいけないの。ずっと黙つててごめんね。千歳はお母さんとずっと一緒にいようね。」

え・・・私はいまだに状況が理解できない。けど、お母さんは泣いている。もう、それだけでただ事じゃないことが分かった。

「お母さん、泣かないで!お父さん!私たち以外に大切な人がいるつてどうこう」と?」

お父さんは真顔で答えた。

「お父さん、好きな人がいるんだ。でも、お父さんにはお母さんや千歳がいるから・・・今まで何もなかつた。けど、お父さん、福岡に転勤が決まつたんだ。それで、その人に、「一緒に住もう。」つて言われて。お父さん断れなかつた。だから、こんな中途半端はいけないとthoughtして、こうすることに決めたんだ。」

お父さんの言葉を聞いて、なぜか悲しいとか、寂しいとか感じなかつた。感じたのは怒りだけ。

「私、13年生きてて、幸せじゃないって感じたことなかつた。でも今日初めて感じた。ああ、私、不幸だな。つて。こんな父親持つたこと。「うん。そうじやない。ずっと不安でいつぱいだったお母さんの気持ちに気付けなかつたことだよー」この上ない親不孝者になつちゃつたんだよ、私。仕方ないよね、お母さんを幸せにできなかつた者同士一緒にいたつてさ。丁度良かつたんだよ。離れることになつて。でも、一緒にしないでよね。お父さんは最後までお母さんを幸せにできなかつたけど、私はこれからお母さんを幸せにしてみせるんだから！」

そう言い放つた私の目にはもう涙が溢れてたことは言ひまでもないよね。私が怒りを感じた相手つて、こんな最低なお父さんにじやなくて、自分自身だったんだね。

お父さんのために用意してあつた夕飯が食べられることがなく冷たくなつて、テーブルの上で佇んでた。

お父さんは家を出て行った。お金のことをせりやんとするみたい。私はよく分からなかつたけど。

その日も、お父さんがいなくなつたこと以外は何も変わらないこの家で、私はお母さんと夕飯を食べた。私の好きな牛丼だつた。紅シヨウガたっぷりの。私はいつもなら、夕飯の時に、その日あつた出来事を話したい放題話していた。お母さんはちゃんと聞いてくれるの。でもね、その日は何も話せなかつた。お父さんのこと以外の話題がなかつたんだ。沈黙が続く。お母さんだから、沈黙しても別に氣まずくはないんだけど、なんか落ち付かなくて牛丼の味が分からなかつた。そんな時、お母さんが何か思い出したように話しだした。

「お父さんがさ、離婚の話を出した時、千歳がお父さんになんか話してたよね。あれね、お母さんすぐ嬉しかつた。でもね、千歳はひとつだけ間違えてたよ。「お父さんは最後までお母さんを幸せにできなかつた。」って言つたでしょ。あれね、違うよ。」

「え・・・?」

「お父さんだつてひとつだけかけがえのないものくれたよ。」

「・・・?」

「千歳だよ。お父さんは千歳をくれたんだよ。ほら、ひとつ幸せくれたよね。」

涙目で話すお母さんの顔を見て、私は大泣きした。さつきまで味のなかつた牛丼が、いきなり塩味になつた。そんな私を見て、おかあさんはやさしく笑つてた。

- - -

## ぴーなつつの出合い

もう7月。あと2週間で誕生日が来る。去年まで、「たんじょうび」と聞けば、

(プレゼントはなにもらおう?)

それしか考えてなかつた。たつた1年しか経つてないのに、1年前の自分がひどく幼く感じる。いや、大人ぶつてるわけじゃないんだよ?でもさ、今年は誕生日どころじゃないんだよね。早くお母さんをみつけなきや。このまおじゅーonely Birthdayになつちやうよ。

## キンコーンカンコーン

鐘が鳴つた。よし、お弁当だ。今日も屋上でランチタイム。屋上とかベタなスポットなのに案外誰も使わないんだよね。あ、みんな教室で食べるもんね。普通は。まあ、いいや。お昼食べよーっと。

風が気持ちいい。空はこんなに晴々としてるのに、私だけ何でこんなにモヤモヤしなきゃいけないの?ほら、さつき教室にいたクラスメイトだつてみんな、何も考えないで、ただ平凡に暮らしてるんだよ。この世に神なんて存在しないんだ。平等なんてありえない。

私は卑屈。妬みっぽくて僻みっぽい。相手に悪く思われたくないから誰にも愚痴など言つたことがない。だけどそれは、“いい子”なんかじやなくていい子ぶつってるだけなんだ。家でも外でも。

いつも屋上に来るとこいつもいつも想つ。

「なんで私だけ?」つて。

私以外の人もみんなモヤモヤすりやいいんだ。つて……。モヤモヤの原因は大体分かってる。けど、その原因無くモヤモヤする気持ちはないわけじゃないのに、怖くてさ。できないの。

私って可愛そうなのかな……。

もひてきたお弁当箱を開きもせらず、青い空を眺めてただぼーっとしてたら、なにか幻聴のよつたものが聞こえる。

「・・・・・」

なんか男の子のよつた声。低くて。耳をふさいでも聞こえるの。体の底から響いて聞こえてくるの。重低音つて言つのかな?なんか眠くなつってきた。

「ぴーなつつ。だつてばー」

今度こわはつたり聞いた。後ろだ。

振り向くとそこには男の子が立っていた。

「な・・・に・・・・?」

あれれ?なんで私がびびつてんの?男子苦手だから?いや、そんなことじじゃないな。あ、苦手だけども。

「やつと飯付いた?オレ、9ヶ円も一緒にいたのこな。」

はひ?9ヶ円?

「それって・・・。」

「なに？」

「ストーカー・・・？ひいい〜〜？！」

あらうことか私は取り乱してしまった。

「オレがストーカー？違うよ。ストーカーってあれだろ？あとつけて、電柱<sup>でんちゅう</sup>柱<sup>うばしら</sup>の陰からこつそり観察して、家まで着いて行って、そんでもつて盗撮とかしちゃうやつだろ？」

「そうだね。詳しいんだね。」

冷めた目で見てやつた。

「だからちげえって。話<sup>シ</sup>を聞<sup>ケ</sup>い！」

とりあえず私はその、“ぴーなつ男”の話を聞くことにした。

## ぴーなつつのわけ

ぴーなつつの男が話し始める。

「ちゃんと聞けよ？めんどくせえから一回しか言わねえぞ？あのな、9ヶ月前って言つたらさ。率直に言つけどおまえの父ちゃんが出てつた時期だろ？そう、その時くらいからオレはおまえの傍で暮らすことになつたんだ。もちろん見えなかつただろうな。今までは。それはおまえの孤独な気持ちが小さかつたからだ。でも今、オレがこんなにハツキリ見えるつてことは・・・。おまえは相当孤独なんだよ。」

苦笑いで話すぴーなつつの男。なぜだか無性にイラついた。

「私孤独じゃないよ！なにそれ！全然孤独じゃない！」

全力否定してやつた。何よこの男は。初対面の人には、孤独だ、孤独だつて。失礼じやない。

「だから初対面じゃねえーんだつて。」

「はい？」

「何勝手に人の心読んで！個人情報保護法を無視する気？！」

誰かと話すのなんて久しぶりだった。だからなぜか私のテンションはおかしかつた。

「おまえのどの辺が孤独じやないつて？」

人の質問は無視かい……。

「『どの辺って……。じゃ、じゃあ、逆に私のどの辺が孤独なの?』

「んー?何個言えばいいんだ?とりあえずまあ、強いて言つなら……。自分の思つてることちゃんと伝えられない?ってか伝えられる相手がないとこかな。」

腕組みしながら、すました顔でいうぴーなつ男。むかつくなび、まあ、言つてることは正しいかもしない。私、思ったことどいつもか、会話が出来る相手すらいないもん。

あれ?なんでかなあ。この人には私、普通にものを言つひとできる気がする。さつきもむけやんと、

「自分は孤独じゃない。」

つて伝えられた。結果それは間違いだつて気付かされちやつたけど……。なんか途端にこのぴーなつ男に心開けてきた気がした。

「オレに言つたい」と言えるのはな、オレとおまえはぴーなつだからだ。」

「はあ?」

「ごめん。前言撤回だ。心開けた?こんな変人に?ないない。なにがぴーなつ?つてかどんだけぴーなつ好きなの?この男は。

「やっぱ変な顔したな。ははっ。今、意味分かんない奴だつて思つ

ただろ？当然だけじな。」

「・・・。」

「ぴーなつひこか、どんな状態だ？」

「え・・・？どんな状態つて？えつと、一つの実こ、一つタネが入つて・・・。」

「わうわう。そのタネがオレとおまえ。」

「はあい？」

「オレがおまえの傍にいる」とはおまえが生まれた時から決まってた。驚いた？」

「おお・・・おふうう・・・。驚いた。」

「まだに理解できてない・・・。生まれた時から決まってた？ええつ？！」

「え、でもさ、私の傍に来たのは9ヶ月前なんでしょう？おかしいじやん。」

「ああ、傍に来たのはな。でもそれより前からおまえのことは知つてた。」

よく分かんないなあ。なんで9ヶ月前なの？お父さんのことが関係あるつて言つてたけど・・・。

「それはおまえが寂しがつてたからだ。んー、孤独つてやつかな。」

「またそれか。孤独か。つてか人の心をまた読んだのか・・・まあいいや。」

「私が孤独だからアンタは私の傍に来たの?」

「そうそう。あとさ、オレ、ぴーなつつ男じゃない。」

しまつた。この男は心が読めるんだつた。

「じゃあなんていうの?」

「たいよう太陽・・・だよ。」

小さい声で、この目の前にいる太陽は言った。

「太陽か。ふふ。温かそうだね。」

「私がそりゃ」と、

「あれ?笑わないの?」

す”く不思議そうな顔して聞いてきた。

「え、 なんで笑うの?」

「あ、 私も質問返しちゃった。

「うさ。 まいいや。 今度話すよ。 それじゃ、 教室戻れ。」

「うん。」

## なりゆきにまかせて

太陽と衝撃的な出会いをして、まだ、現実なのか夢なのかよく分かつてない。5時間目は体育。着替えなきや。そう思つて教室に入る  
と誰もいない。あれ？ 時計時計。・・・ん？

いやああああ――――！？

時計の針達は1時40分をさしていた。授業開始から10分も経つ  
ている。今までベル席（授業開始のチャイムが鳴り終わつてから  
席につくこと。）なんてしたことない模範的生徒だったのに・・・。  
よし、こうなつたら仮病だ。保健室へGO。

保健室は私の教室、2年2組の教室を出て、30段階段を降りて、  
反対側の校舎の1階。あちや、渡り廊下を渡るんだ。あそこは校庭  
からよく見える。ダメじやん・・・。体育の教科担任、吉川先生は  
なんかすごく怖い。このまえなんて、授業中ふざけてる男子に柔道  
の・・・なんちゃらつて技かけてたし。痛そつた。  
ベル席なんてしたらよくあるあの、校庭何周〜とかいづ罰をつける  
に違いない。それだけは免れたい。じゃあどうするか・・・。

「なあ。」

太陽？ なんでここにいんの？

「うーんにこちやダメじやん！ 見つかつたらやばいよ？ 一・

「え、なんで？ 今日は転校手続きをしに来たんだけど。まあ、ホント言つと入学手続きなんだけどな。」

「なんで？太陽が？」Jの学校に？に入るの？なんで！？」

「おまえが寂しくなくなるまで傍にいるんだから、学校だつて一緒に行くんだよ。今までだつておまえと一緒に授業受けてたんだぜ？おまえが気付いてないだけで。」

「え？？一緒に？」

「じゃあテストの時とか回答見てたってJと…」

「当たり前じやん。」

「ぬわーんですと？？」

「勝手に見ないでよー。」

「別によくね？平均点よりちょっと下つてだけじやん。」

それがいけないんだつて……。それにはあのときは平均点がかなり下がつてた時だしね。それで平均点以下つて……人に再び面を向かうべからず、だわよ。

それに、太陽つて喋んなきや、まあ、顔はいいと思つし、背も高いし。髪の毛サラサラだから、学校なんて来たら「彼氏ほしい」って言つのが日常茶飯事になっちゃつてゐづちのクラスの女子の格好の餌食じやん！

いや、今そんなこと考えてる暇はない。

「早く行かなわやー。」

「それならオレにこうい考えがある。」

「なにや。」

「簡単なことだよ。オレの横を普通に歩くことや、おまえはまつちやいんだから校庭から見えないだろ?」

あ、そっか。そんな簡単な事か。って

「人の子とせりうとチビ呼ばわりしてんじゃないわよー。」

「155cmで、よんじゅ・・・ふつつ」

「なんで、なんで、なんで体重まで知つてんの?!.変態?」

「は? よんじゅ155cmでしか言つてねえだろ?ー。」

「なんだ知らないのか。ほつ。」

「保健室いくんだろ? ほれ。」

太陽がいきなり私の腕を引っ張った。

あつという間に渡り廊下に着いた。

「普通に歩けよ?。」

「う・・ん。」

うわあ。なんか緊張してきたよ。ばれないと思つけど・・・。あれ、渡辺君見てる？気のせいか・・・。なんか長くない？こんな長かつたけ？この廊下。ん？なんか顔が熱くなってきた・・・。心臓がドキドキというかフイーバーしてる。。

「着いたぞ？そこだろ。保健室。行つてこいよ。」

「あ、着いた？太陽、ありがと。」

私が軽くお礼を言つと太陽は微笑んでた。気持ち悪いな。  
なんだアイツ。

「失礼します。」

「あら、<sup>ふくい</sup>福井さん。あ、「めんなさい。ホントに。」

「いや、全然・・・。」

両親が離婚して、私の苗字は福井から夢咲になつた。

「あの、<sup>ゆめさき</sup>夢咲さん。どうしたの？」

「頭が痛くて・・・。」

「うわうそ。ちょっと顔が熱いだけ。

「ホントね。顔がちょっと赤い。熱測つてみて？」

そういうって、保健の先生、花園先生は、体温計をくれた。

・・・。

「ペペジ」

37・0

「//リリーリーだー//リリーリーが起つた。あら、神様つているんじやん?」

「どれ。あひ、37か。ビリする?帰る?もつじ様子みる?」

即答で。

「帰ります・・・。」

「じゃあ、荷物持つてくるね。」

「あ、自分で行くので平氣です。」

「あ、だいじよぶ?じゃあ電話しなきゃー夢咲さん、お家の番号は

?」

「家、誰もいないので、歩いて帰ります。」

「平氣なの?私が運転できればなあ。気をつけたね。」

「はい。ありがとうございました。失礼します。」

早退届けだけ持つて私は保健室を出た。

あら、太陽君。ずっとそこへいたのね。

「うん。あ、どうだつた?」

「え?」の方、心読めるんじゃなかつたの?

「なんか、読める範囲があるらしー。」

「読める範囲?」

「ああ、壁一枚はさむと読めない。多分表情で判断してるからだ。」

「表情?」

「うか。表情か。じゃあ、

(アイス食べたい。)

そう思つて、じびっきり変な顔をして太陽を見た。

・・・。

なに?この沈黙・・・もしかしてスベツた?恥。

「・・・ぶふつ。『アイス食いたい。』だろ?」

「なんで?何でわかつたの?」

「え、顔に書いてあつた。」

はひ？あんな顔に？どの辺に？理解不能だ。

「熱が、ちょっとだけあった。」

「大丈夫のかつて・・・当たり前か。」

「ふふう。あ、荷物持つてこなきや。」

私と太陽は行きと同じ方法で渡り廊下を渡つて教室にたどり着いた。

後ろの方の扉を開けた。

！！！

渡辺君？！え？なんていんの？

「あ、夢咲さん。そちらは・・・？」

なんか言つてる。え？私？何で私に聞いたの？私はあなたと喋りたくないんだけども。

「あ、オレは・・・太陽。明日からクラスメイトだよ。よろしくな。」

にっこりして太陽が言つと、

「こっちこそ。」

つて渡辺君も笑つた。

「じゃあな。」

私達が教室を出てくと、渡辺君が手を振っていた。

なんだ・・・。渡辺君つていい人じゃん。なのに私、勉強以外に興味なさそうだからって勝手に嫌なイメージ持つて・・・。最悪じやん。私。私以上にブラックハートな人つているのかな?

「まあ、第一印象でイメージよくないのは仕方ないとして、話そつともしないで悪いイメージ持つのはよくないはな。」

「やうだよね。気をつけなきや。」

今度渡辺君と話してみようかな。

「あれ、太陽も帰るの?」

「当たり前じやん。」

「ど二二二二?」

「は?おまえと一緒にだよ。」

「はあっ?」

私達は校門を出た。



## ナレに見るもの

・・・・・・・・・・・・

あれ。ここは私の家ですかね？なんで私の居心地が悪いのかな？

それは・・・

「オレがいるから、だろ？」

「分かってんならなんで入ったんだよ？？大体今日初めて会った人をうちに入れるなんて・・・。」

「だから初めてじゃねえって・・・」

「私にとては初めてなの！」

「変な感じだな。オレは半年以上一緒にいるのにな。」

「知らない。。。でも、いや、やつぱなんでもない。」

「初めて会つ割にはよく話せるのが不思議・・・だろ？」

「分かってんならいちいち声に出すなーなんか恥ずかしいじゃん。あ、そうだ。さつきさ、授業も一緒にうけてたって言つたでしょ。でもなんでクラスのみんなにバレなかつたの？」

「え、おまえがオレを見れなかつたように、おまえがオレのこと見えるようになるまでは他の奴にも見えないんだよ。」

「そういうもんか。聞きたい」とたくさんあるんだけど……。全部聞いてもいい?」

「ん。別にいいけど。」

「じゃあ、私が生まれた時から太陽が私の傍にいる」とは決まってたって、あれはどうこいつ?」

「ああ。人ってさ、絶対魂を持つてんだろう?でもオレみたいな奴らは単体の魂じゃ、体に入る事も何かを考えることもできない。つまり、ホントの人間の魂と同盟を結ばなきゃ生きれないってことだ。その同盟の名前がさつき言ってた「ぴーなつ」だよ。それは代々継がれてきた名前らしい。オレはおまえに呼ばれた。その時から同盟は成立する。sonだけの話だよ。」

「sonだけ?やばい。まったく分かんない。「ぴーなつ」のくだりまでは分かった。けど、私が太陽を呼んだ?なにそれ?」

「魂が呼ぶんだよ。んー。逆に言うと、オレらは人間の叫びを聞くと引き付けられるつていうか……。あ、でもすげえんだぞ?同盟結ぶつて。大抵は結ぼうとする「なんか違う。」つてなつて結べないことが多い。それほど強い叫びじゃないと結べない。じゃなきや、オレみたいにずっと一緒にいる。なんて軽々しく言えねえもん。」

「そういうもんかあ。同盟ね。貿易みたいだね。私と太陽はなんで結べたのかね?なぞだ……。」

「それはオレにもわからんねえ。けど今オレに入ってきた情報では

同盟を結べたのはオレとおまえと、あともう一組だけりし。すげえな。」

すげえっ。だつて世界中で人間つて約70億人でしょ？70億分の2つてやばい！世界規模で抽選2名様のキャンペーンやつたとして、私ともう一人誰かが当たつたつてことでしょう？うわあー！私今まで何応募しても当たつたためしがないのに。

お父さんはよく当てるたな。お父さん、今何してんのかな。元気かな。最初のうちはやっぱりお母さんの心を傷つけたお父さんが許せなかつた。けど時間がたつにつれてお父さんとの思い出が蘇つてしまつてさ・・・あれ。おかしいな。目から涙が・・・鼻から鼻水が・・・。

「おまえが、泣きたいときに元びつして我慢するの？泣きやいいじやん。」

「・・・だつて。泣いたつておかあさんもおじいさんも帰つてくるわけじゃない・・・。」

「泣いたら帰つてくるなら泣くのか。じゃあ一生帰つてこなかつたら？？一生泣かねえの？無理だろ？そんなこと。人間なんだから泣け。無理して笑うな。」

「うん。ううああああ――――――――――――――」

このあとどんくらい泣いたんだろう？太陽の服鼻水と涙でびぢゅびぢゅだつた。ごめん。

いっぱい泣いたらすつきつした。けど、目が膨張した気がする。

この後も太陽に色々質問した。

- 私のところに来る前はどうにしてたの？ -
  - 寝てたんだよ。空の上で。おまえに呼ばれたから行つたら、大きくなつて驚いた。 -
  - 太陽はどうやって生まれたの？なんで男なの？ -
  - それだけはオレにも分かんねえや。
  - 太陽は言葉とかどうやって覚えたの？ -
  - 目が覚めた時にはなぜかもう理解できてる。
  - 最後にもう一つだけ・・・
  - 「どうして太陽って名前なの？」
  - 「どうしても話さなきゃダメか？」
  - 「うん。だめ。」
  - 「なんか。目が覚めて、おまえのとこに行く前、不思議なじいさんに会つて、あの子のとこへ行くなら名前がなきや不便だらうつて、その、なんか、おまえにとつて太陽みたいに温かい存在になれつて。言られて・・・。だあ！なんだこれ。」
- 激しく照れる太陽が可愛く見えた。

「そんな由来があつたのか。なんで、」

「え？」

「少しも恥ずかしがることないじゃん。そんな由来なら嬉しい。」

素直に私は嬉しいと思つた。

私は太陽の姿を今日初めてみたけど、やっぱりどこか初対面のよう  
な気がしないのは、私達が  
「ぴーなっつ」だからなんだね。

ピルルルルルルルルツ・・・

あ、電話。はい？知らないなあ。無視しようかな。

「出るー。」

え？

「はい、夢咲です。え・・・・・？」

電話は病院からだつた。

## 過去の涙にやるなり

午後4時だった。家に電話が来た。病院からだつた。お母さんが病院に運ばれたらしい。8ヶ月前に家を出て行つたお母さん。出て行った理由は私にも正確にはわからない。けど、明らかに元気がなかつたのは分かつた。お父さんが出て行つたあの日の夕飯、一緒に牛丼を食べて以来お母さんは一緒に食事をしていない。次第にお母さんはあまり家に帰つてこなくなつた。私が学校に帰つてくると、たまにお母さんがいる。

「ただいま・・・。あ、お母さん。帰つてたの。今日の『』飯は?」  
「うわわわわ。」

「『』ねえ。じゃ、あとで私が作つておくれ。お母さんのす・・・

「うわわわわわわわわわわ・お母さんの分はこらなこから・・・

「アリ。」

お母さんは寝室へ行つた。今は6時半。まだ寝るはずないよね。

「いただきます。」

テーブルの周りには3つイスがある。使われるのは一つだけ。お父さんが出て行つてから2週間経つのにまだお父さんの歯ブラシ、コップ、箸、などは残つていて。捨てればいいのに。

私は年相応に料理はできる方だけ、あんまり美味しいでできないんだよね。なんでかな。

あ、明日資源回収だ。お父さんのもの出しついで。

翌日

「おやけ出しついた。

今日は元旦だから部活がない。早く帰つていれた。

あれ？

開いてる。お母さんいるのかな。

「ただこま。

「千歳~。うひつと・・・

お母さんに浮ばれた。なんだひつと・・・

え？荒らされた部屋。お母さんの、今まで一度もみたことが無いような怖い顔。あれ、私、朝、鍵かけたよな？空き巣はないと思つんだけど・・・。

「お母さん何？」

「お父さんとのもの捨てたの千歳・・・？」

「え、そうだよ。こつまでも持つても仕方ないかなって……。」

一瞬間が空いた。

「つ・・・つやけんなよー。なんであんたはいつも勝手なじりまつかするんだよ……。」

な、なになに？お母さん何？え、苦しい……。やめじよ。

どかっ

あ・・・。

「お母さんじめんね？」

勢い余つてお母さんのこと蹴つちやつた。

「あんたはホントに親不孝もんだねえ。まさか。親の顔が見てみたいねえ！－それは私だよつ！－」

お母さん？もうこの人はお母さんじやない気がする。

- - - -

この出来事があつてから2週間後くらいに経つてから、朝起きるとお母さんの姿がなかった。朝いないことはたまにあつたから別に驚かなかつたけど、その次の日も、その次の日も、お母さんは一度も帰つてこなかつた。

「千歳はお母さんとずっと一緒にこよつね。」

あの言葉。信じじたのにな。

やだやだ。また涙が。

今は電車の中。太陽と2人で総合病院まで行く。お母さん危険な状態らしい。

薬物だつて。この前学校で習つた。私は絶対嫌だと思った。怖いもん。なのにそれをお母さんがしてたなんて。信じられない。

着いた。

「あの、夢咲です。」

受付の看護師さんに声をかけた。

「あ、夢咲さんですか。あちらへ。」

私達は、指のさされた方へただひたすら進んだ。お母さんのいる場所はすぐに分かつた。けど、なんか途端に怖くなつてしまつた。でも、入らなきゃ。

「お母さん……？」

これがお母さん?誰かと思つた……。

お母さんはこんなに瘦せてない。

お母さんはこんな顔色悪くない。

お母さんはもつときれいな髪の毛だつた。

お母さんはもつと・・・優しそうだった。

なんで? なんで? お母さん? 起きないし . . .

「お母さん？お母さん...」

いくら呼んだって1mmも瞼は動かない。

「今日は、もう帰ろう。な？ また元気になつたら来ような。」

太陽が私の背中を押す。私は従うしかなかつた。

ダメだ。今、口きいたら絶対涙が・・・あ、そうだ我慢しなくていいんだ。

「太陽。お母さん平気かな。死んじゃつたりしないよね？」

やつぱ出て来た。もう止められないや。

「ああ。信じてろ。」

「え？」

「お母さんは死なないって信じてる。そうすりや大丈夫だ。」

卷之二

根拠はないけど、やつらじむじとした。今私は泣いている。それに笑っている。

お母さんが無事であることを信じて・・・  
ために泣こう。

もつ過去のことで泣くのはやめよう。私は未来、これから先に繋ぐ

はじめまして。

昨日は大変だつた。お母さんが病院に運ばれたことを知り、そのことがショックで泣き崩れた。いまだに立ち直れない部分もある。お母さんが病気か何かで病院に運ばれたならそこまでショックではなかつた。でも、麻薬関係だつたら体調がよくなり次第、刑務所行きでしょ？そんなの・・・でももう泣かないよ！昨日泣き切つたもん。太陽に迷惑かけたし。ウジウジしてたつて変わんないもんね！元気に行こう。

太陽は結局家に住むことになつた。なんか他人と思えないし。ご恩もたくさんあるからや。

それについて・・・私の部屋で寝ることなくない？？

「いつもここで寝てたから。」だつて。えええええ？？？いつもかい！って話だよ。っていうか・・・。

「おはよ。」

！――？

「いきなり話しかけないでよー。」

「どうせ起きてたんだろ？早くしねえと遅刻だぞ。」

「8時半までに登校すればいいから平氣ですうへへ..

ん？ 7時50分。〇九一〇一！

私の家から学校まで、2?ちよつとある。だからいつも7時45分には家を出でいる。これじゃあ、朝ご飯食べれないし……。お弁当も無理だ……。パン注するしかない。お金お金。

・・・あれ？なんか見てる。

「・・・」

何が言いたいんだ？私はあなたの心は読めないつつの。

「お金・・・トモ。」

ああ。お金か。

「いいよ。でもロパンね。（一番安いやつ。）

「マジか・・・。」

そのロパンは成長期の敵かっこくらこの量しか入ってない。でも私のお小遣いの量ではこうするしかないんだよ。お金どうじょ。この先1ヶ月分の生活費があるかどうかくらうだ……。

時間ヤバい。それはあとで考えよ。

髪の毛は寝癖付いてるからお団子で元気やがれやがれ。歯磨き洗顔…出発…

「間に合わないかもだから走るよー。」

「おひ。」

あれ？？自分で走るって言つたのに・・・。太陽とかなり差が付いてる・・・。私こんなに走るの遅かつたつけ？

「ほれ。」

気付けば太陽は田の前にいた。太陽の手をつかんだら、そのまま引つ張られた。なんかデジヤヴ。昨日のあれだ・・・。

着いたけど、疲れた。これから授業とかあり得ないし。

「オレはこの後校長室行つて転校手続き完了させてくるからー！R中にはおまえのクラス行くからー！..じゃーなー！」

と言いながら太陽は、私の靴がある下駄箱と反対方向の下駄箱に靴を置いて出て行つた。

ガラツ

本来、誰かが教室のドアを開けると「おはよう。」って聞こえてくるはずなんだけど。私の時には聞こえない。1年の前期までは友達だつている方だつた。後期に入つてからは徐々に友達が減つていつた。私が減らしたのかもしけないね。どうでもいいんだ。私の話相手は一人で十分。変なやつだけどちらんと話を聞いてくれる。うん。あの方で十分、十分。

「今日、転校生来るんでしょ？」

「男子だつて！カツコいいかなあ？？」

「いやあ。あんま夢見ないほうがいいよ……。」

「あつはははははは……。」

「あ、千歳の隣じやん！むかつぐ。」

「まだカツコいいって決まってないから！」

私の名前気安く呼んでんなよ。もうみんな太陽のこと知ってるのか。あ、この子達だよ。「彼氏欲しい。」って言うのが日常茶飯事になっちゃってるっていう人達は。私はあまりかかわりたくない。嫌な思い出ばっかりだから……。

## キンコーンカンコーン

あれ、あつという間にHRの時間だ。私の席は一番後ろ。くじ引きでこうなった。私は窓際から2番目の席。人数の関係でこうなつてんの。もう机が置いてある。ここが太陽かな。

先生が入つて来た。太陽が横にいる。

女子うるせえっ。男子は固まってる。そりいや太陽に苗字つてあんのかな。先生がチョークを持った。

五十嵐 太陽

「五十嵐太陽です。よろしくおねがいします。」

すごい歎声。でも今一番驚いてるのは私だと思ひ。

「五十嵐」って私の大好きな歌手の名前。太陽は知つてたのかな?  
なんかすごい。

「五十嵐の席はあそこな。」

案の定私の隣だ。ああ、やっぱ女子に睨まれてる。気にしない気にしない。

太陽が席に向かつて歩く。

「よ。驚いた?」

「当たり前じやん・・・。知つてたの?」

「それこそ当たり前じやん?」

「そつかあ。」

なんか照れた。

キンコーンカンコーン

終わつたー！次は理科か。教室だよな。うん。準備して待つてようつと。

ドカッ！

なんだよ？？ちょっとムツとしながら左側に顔を向けると・・・。  
アンビリーバボー。なんだこの女子の群れは！あり得ないだろ！

「太陽君つていつの？あたし、西田愛里沙つていつのー。みんなべ。あつさつて呼んで？」

西田がそつ言つた瞬間、

(呼ぶかよ・・・。)

太陽が言つた。ストレートに言つんだね。それにめつちや無表情！

「ああ。」

ありつへ…。「ああ」？それって、OKってこと…ぢりちなんだよ。面倒くわざつなど」とか同じ感じな言い方だけぢ…。わけ分かんない。

「あたしは佐々木智美さあきみ…ともつて呼んで？」

(つかえーなあ・・・)

あれ？これつて…。

「ああ。」

また「ああ」か！

おつと、もう一時間始まるよ。

キンローンカンローン

「起立、氣を付け、礼。おねがいします。」

これやんなきゃいけないのかな？まあ礼儀は大事だよねえ・・・つて。なんでまたこっち見てんの？？

(教科書見せてほしい。)

ああ。まだ届いてないのね。仕方ない。

「え？」

太陽が不思議そうな顔してる。」うちが「え？」だよ。まったく。

「はい。教科書見せればいいんでしょ？自分で言つたんじやん。」

「オレ言つてねえよ？」

「はい？」

「お前もオレの心読めるようになつたのか？」  
言つたじやん。「教科書見せて」って。ん。これってまさかの・・・。

「お前もオレの心読めるようになつたのか？」

なぜ嬉しそうに言つ？」うちとあんまり嬉しくないぞ？人の気持ち  
なんて知れたらうへくなこと言われないよ・・・。

「オレは言わねえけど・・・。」

なんでそんな顔して言つの？？

「これ、夢咲、五十嵐！教科書見せるのはいいが話を聞いてくれ。」

やばい。注意されたよ。

「すいませー。」

もつ。女子の視線がチクチク刺さつてくる・・・。そんなみるなー。私悪いことしたか？

(おまえもオレの心読めるんならずと心で念語じよハザー。)

(そう言われてもね、顔みてなきや何言つてんのかさつぱりだよ。。。だから授業中は黙つて授業を受ける。分かった？)

(ええーー。オレは喋りたいんだけど・・・)

(知らないよ。だつて怒られたら成績落ちて高校いけなくなるんだよ？)

(高校？おまえ高校行きたいの？)

(当つ前でしょ？！)

「これー夢咲と五十嵐！仲良いのは構わんが今は板書をせい！板書をー！」

「はー・・・。」

まだ・・・。不思議と今は成績よりみんなの顔の方が気になる・・・。やっぱ黒板写そつ！

トントン。

(だからー・シャラップー・黒板写せー!)

(いや、書くものねえんだよ。)

びりつー

(はーーーこれあげるからもう話しけないで。)

キンコーンカンコーン

無事に終了・・・。隣の人のおかげで今日は二度も注意された。以後気を付けねば。

「なあ。」

「なー?ー?」

「この後も教科書見せてほしいんだけど・・・。」

「いいけどだ・・・つーーーー?」

私の話を遮るように西田達が入って来た。

「太陽君教科書ないの? あたしの貸してあげるよ?」

「いらない。オレはこいつの借りるからだ。」

やつ血ひて私の頭に手をのせた。おー。縮むだら。

「な・・じ・いんだけど・・・。」

西田さん、おもくそ睨んでます、どうしたらそんな眼つきが出来るの、今度練習して太陽にやつてみよつかな。効くかな。この人に、「ちょっと、ずっと思つてたけど私のこと、ここいつとかおまえとか！しかも頭に手置こわやつて！私のことなんだと思つてんの？！」

「じゃ、ち・と・せつて呼ぶよ。」

「ルルーリーとじやなあーーー。」

あ、しまつた。ルリは教室だ。私はこんなキャラじやない。

「いいじやん別に。それがホントのおま・・・千歳ちとせなんだろ？だつたらそのまままでいろよ。」

「無理。」

「なんで？」

「ルリの性格だからなにもかも上手くいかなくて、大切なものがつか行つちゃうんだよー。」

「なんでそんなこと・・・。」

太陽が黙つた。私は熱くなつて涙目だった。

あれも丁度1年くらい前かな。

## 転倒

1年前・・・

- - -

誕生日があと少しで来る。この年になつても誕生日が近付くとしきつきする。今年はなんとー・ミュージックプレイヤーもらうのー・もう言つといたからきつと買つてるよね?あ、もう時間だよ。行こ!」

「いっべきます!」

あれ?返事がない。なんか嫌な気分だな。きつと台所で洗いものじてて聞こえないんだ。じゃあ・・・。リビングのドアを開けて。ど。

「いっべきます!-!」

どうだ?

「ああ、いっべきしゃい。」

うん。満足。

今日もいい天氣だな。太陽出てる。汗つかぎだから正直、太陽には雲に隠れてもらいたい。

ガラツ

「おはよー。」

私は人より声がでかい。だからみんな私の声に気付いた。

「あー、ちとちやん、おはよー。」

「ちと、おはよー。」

毎朝声をかけてくれるのは小学校からの親友、のん。優しいから大好き！あと、違う小学校の中で一番最初に友達になった、ことちやん。今は3人で仲良しなんだ。

「ちとー！後期委員会どうすの？私は美保委員やりたいー！」

「へえ、のんは美保委員がいいの？！頑張って！多数決になつたら絶対手擧げるね！」

「ありがと。」

「！」とちやんはなにやるの？

「あたしは規律かな。」

「規律かあ。大変そうだよね。」

「ちとはなにやんの？」

「私は学級委員ーー。」

「うふ。ちとちやんならなれるね。あたし絶対手擧げるよ。」

「ありがとうね。」

## キンコーンカンコーン

1時間目の中H.R. I.I.Jで委員会決めがある。後期まで2ヶ月あるけど今決めないと間に合わないんだって。

「まず、学級委員の立候補者はいますか？男女各一名ずつです。ま  
ずじゃあ、男子から！」

「はい。」

一人しか挙げてない。黒崎君か。この人、何気人気あるよね。どの部分がいいのかよく分からぬけど。いまどきって男なら誰でもイケメンって言われない？？あ、黒崎君ごめん。別にあなたの悪口を言つたわけでは・・・。

「黒崎君だけですか？そしたら黒崎君に決定します。拍手。」

パチパチ・・・

「では次、女子…いますか？」

すかさず手を挙げると・・・。あちや。愛里沙ちゃんも手挙げてるよ。事前調査では誰もいなかつたから安心してたんだけど。こうなつたら戦おう。

「二人ということなので多數決になりますね。二人は前に出て意氣込みをどうぞ。」

愛里沙ちゃんが私に先言えつて言つから先に言つたりとした。

「えつと、前期は放送委員をしていたんですけど、前期に学級委員をやつていた西田さんを見て、私も学級委員になつてみんなをまとめたい。と思ったので、立候補しました。よろしくお願ひします。」

「どうや。下手に出る作戦だい！」

「私は前期も学級委員をしていて、やりがいがあつたので、後期もやりたいなと思つたので立候補します。よろしくお願ひします。」

まあ、どうちがなつても恨みつゝ無しだよ。

「はい。ではみんなは伏せてください。どうちかに一回だけ手を上げてください。」

「うわあ。緊張するなあ。私にもみんなの様子は見えないからな・・・。

「ではまず、福井さんから。福井さんがいいと思つ人は手を上げてください。」

・・・。

「はい。では次、西田さんがいいと思つ人は手を上げてください。」

・・・。

「はい。田を開けてください。多數決の結果、福井さんに決まりました。みなさん拍手！」

パチパチ・・・

あ、のんが笑つてゐる。嬉しいな。頑張らなくつちや。

チツ・・・

ん？舌打ち？愛里沙ちゃんそんなにやつたかったのか・・・悪いね。でも勝つたもん勝ちじやん？なんて当たり前のことを口に言つてんだあたしやあ。黙つて席についひ。

順調に委員会も決まり、のんは美保委員になれた。でもことちゃんは・・・。一票差で負けちゃつた。すぐ悔しかつた。でもまた来年もあるもんね。

今回の委員会決めで、大きく何かが変わる事とも知らず、私はのんきなことばっかり考えてた。

翌日。

「おはよー！」

教室に入ると、のんと同じくやぶがいない。どうだ？あ、いつものとこかな。一人が朝行くといふと言えばただ一つ、トイレだ！

キイーー

トイレに入口を開けるとやつぱり一人はいた。

「のんといふちやんみつけたつーなにしてんの？」

やつに映った私の眼に映つたことかやんの顔は、今までとは少し違つふつに見えた。

「あのさ、ちと。ちとは大事な友達と思つから正直に言ひよ。昨日の委員会決めの時、ことに手挙げなかつたつてホント?」

はあ？ 確かにこの手を天まで屈くべらに思つくり挙げましたけど？

「挙げたに決まつてんじやん！ なんでやつと思ったの？」

「え、愛里沙が言つてた。やつじゃないならいいんだけど。」

え、全然よせやつじやないけども。も、いっていつならいいのかな？

やつぱりこの時もまだのんきなことばかり考えてた。私には危機感というものが全くなかつたんだよ。この日も、その次の日も、ことちゃんとのんは私から一線引いたような態度だつた。

- - -

そしてこの出来事から2週間後、誕生日がやって來た。

私は頼んでおいたミュージックプレイヤーをもらつた。うれしくてうれしくて、誰かに白慢したかつたけど、操作の仕方も何も分からぬ。あ、まず充電か。充電完了したらお父さんに操作の仕方教えてもらおう。

「千歳！ ケーキ、ケーキ！」

私はショートケーキが少し苦手。だから毎年チョコレート。本当に  
おいしいんだ。

「千歳いくよ？ハッピーバースデイトウゴー……」

恒例の歌を両親が歌つてくれた。それから13本のロウソクを吹き  
消した。

「千歳は13才か。まだまだ子供だね。」

「ええ、でも電車は大人料金だよ。だから子供ではないよー。」

「そりゃ。」

優しく笑うお父さん。

この後も、家族3人でずっとおしゃべりしてた。

「そろそろ充電できただんじゃない？」

お母さんがミュージックプレイヤーを充電器から外してくれた。それからお父さんが操作方法を伝授してくれた。早速PCで「五十嵐」の曲を入れた。やった。これから毎日、五十嵐の歌が聞けるんだ。

やつぱりのんとちちゃんは余所余所しくて、誕生日が来るいりに  
はもう、ほとんど口さえも利いてなかつたと思つ。

私は内心、そのことをすくく気にしてた。

私の誕生日から3ヶ月後、お父さんがいきなり離婚宣言をした。どうやらいきなりと思ったのは私だけだつたらしい。お母さんも前から、お父さんに好きな人がいたことは知つていたらしい。この時点で家族の内で私だけ知らないことがあつたと思うと寂しい気持ちだつた。

お父さんは出て行つた。責任を負うため家のローンとかは払つてくれるつて。いつも3人で笑つて、いつまでも3人で笑い続けられると思つてたのに。ダメだね。平和ボケは。

お父さんは出て行つてから2週間後。今度はお母さんまでいなくなつちゃつた。なにこれ？お母さん？お母さんはずっと私と一緒にいるつて言つたじやん。破るためにある約束なんていらないよ。

文章にしたらたつたの7行かもしない。けどこの7行の間に私の中でいろんな感情が生まれた。しかも今、私もしかするとかなり落ち込んでるかもしない。誰かに話すと大泣きしちゃうかもしない。だったらもう黙つてよ。ていつか今、ケンカ（？）中だから話す相手もいないんだけど。

- - -

このまま夏休みに入り、私の苗字は変わつた。夏休み中は、うだうだして、宿題して、うだうだして、を繰り返し、夏休み明け早々テストがあつたから、テストの一週間前からは勉強をした。

まあ、テストは悲惨なことになつてた。のんやことちゃんともいまだに口を利いていない。でももういいの。弁解する気にもなれない。

てか、私は否定したし。信じなかつたのは向こうだじ。

「これの何日後くらいかな？」

誰かが先生に、このことをと話して、ことちゃんに私が手を挙げたかどうか聞いたらしい。もちろん先生は事実を伝えた。そつから広まるのは早かつた。ことちゃんものんも、すぐにそのこと知つたらしい。青い顔してた。それから、私に謝りに来た。私は「別に気にしてない。」その一言だけ言い放つてその場を去つた。

もう2人と関わる気はなかつたから。

人は信じられないって暴君、ティオニースも言つてたし。あ、でもティオニースも最終的には人を信じれるようになつたんだよね。

翌日

「今日の放課後は各種委員会があるので、委員の人は残つてくれださい。」

まじか。部活サボれるじゃん。ま、ここ最近行つてないけどね。んーと、学級委員は1年1組か。隣のクラスね。移動しなきや。

「福井！ もういく？」

「いくけど。私もう夢咲だから。」

「あ・・・ごめん。じゃあ、一緒に行こうぜ。」

「・・・うん。」

長い。話が長い。社会の先生、益子先生はもうすぐ定年。喋るのがとても遅い。私的に可愛いいから好きなんだけど、眠くなるんだよね。

「なあ、益ちゃん話しが長いね？」

益子先生の愛称（？）は益ちゃん。本人の前では呼べないけど・・・。

「ね。長いね。」

この後15分後、よつやく委員会は終わった。よし。帰る。リュック背負つて教室を出ると、

「なあ、夢咲。夢咲つて2丁目だよな？俺3丁目だから途中まで一緒に帰らうぜ！」

「まあ、別にいいけど。」

断る理由ないしいいや。と思つて一緒に帰る事に。

この後、黒崎君は私からすれば興味ない話を延々とし続けた。私の判断ミスで、またまた私を悲劇が襲つ。

この後2日後くらいかな。黒崎君に呼び出された。何の話だ？私はまだこういうのがよく分かんなくて、呼び出されたのに無視してはいけないと、素直に行つてしまつた。

「なんで私のこと呼んだの？委員会の話？」

「違くて・・・あのわ、俺、ずっと夢咲のこと好きだったんだ。」  
付き合ってほしい。」

・・・はひ？付き合つ？つてあの・・・。え？男女が一緒に帰つた  
リゲートしたりのあの付き合つ？

「うめん。  
無理。」

言葉が見つからないからストレートに言つた後、速攻で家に帰つた。

悲劇はここからだ。翌日、学校に行き、教室に入つた瞬間、愛里沙ちゃんが泣きはらした顔で私に掴みかかろうとした。なにかに襲われるとと思つたら条件反射でよける。これが人間だろうに。よけられるとは思つてなかつたらしく、愛里沙ちゃんは顔から・・・。

「くそー！ なんなのよあんた！」

いや、そつちこそなんだよ？いきなり掴みかかってきて。びっくりするでしょう。

「和哉に色使つて近付いたくせに、挙げ句の果てに告られたら振  
るつてアンタどんな神経してんの？！」

なんだかさつぱりだ。この人は何を言つてんの？ 大体、和哉つて誰よ？ 色目つて何？ 告白の部分しか分かんなかつた。

面倒くさいからスルーで。

「なに？逃げんの？卑怯者！」

私が振り向くと……。あ、黒崎君だ。昨日の今日だからちょっと  
気まずい。

「和哉！」「いつでしょ？色田使って近付いて、」  
の気になつて告つたら振つて来たつて奴！」

何の話じゃ」「う。つてか、黒崎君が和哉！？あ、そういうことか。

「うん。やっぱ。」

「うん。やっぱ。って、ええええええ？？？？？？私があんたにいつ色  
田を？しかも色田つて何？」

「『めんな愛里沙。お前と付き合つてんのに告つたりして。俺どう  
かしてた。』

そうだよ。付き合つてる恋人というものがりながらよそ者に告白  
するとか、こいつこそどんな神経してんの？ってか、話が違くない  
？何でこいつに私が迫つたみたいになつてんの？？否定しろやボケ  
黒崎。西田も調子乗んなよ！？てか、私に告白したお前の彼氏は許  
すんかい！？

「アンタ、黙つてないで謝れよっ！……土下座しきり……！……！」

あれ、私……。

ここから記憶が飛んだ。後々耳にした噂によると、私はその黒崎つ  
て男をちよつと痛い田に令わせてしまつたていう話だね。

この一件で私は男が嫌いになつた。

- - -

## 切れない想い

太陽が困っている。周りの人もめっちゃ見てる。太陽がまた私の腕をつかんだ。

「ちょっとこい。」

「怒ってるの？太陽？」

「いや、全く。」

「そのさ、私がこんな性格だから大切なものがどっかいくつてどういう意味？」

「ああ。それは、うん。なんか、1年の頃、告白されたの。あ、あの時はもう太陽、私の近くにいたと思うよ。それでね、私はそのままにして普通に接してたはずなのに、勝手に好きになられた。そしたらみんなに恨まれた。その人が勝手に私のこと好きって言って、私はしつかり断つたのに。なのに私だけ悪者にされて、もう面倒くさいから弁解もせずにその男子殴っちゃって・・・。元はと言えば私の性格がいけないのかなあって。でも、性格なんて早々変えられないでしょ？だから誰とも話さなきゃいいんだって。もし友達がいたら話せたけどさ、友達さえいないんだよ？笑っちゃうよね。おほほ。」

「おい、無理に笑かさなくていいんだよ。辛かつたんだろ？ホントは。友達に信じてもらえなかつたときだつて。その男達に悪者にされたときだつて。なんでそんなに頑張るんだよ？」

「頑張つてない。普通にしてるだけ。」

「千歳の普通つていうのは人と話さない事か？違うだろ？もつと話せよ。いいことも嫌なことも。頑張つて友達作つてみりやいいじゃん。無理だつて言わないでぞ。な？」

「・・・うん。そのうちね。」

「うん。そのうちでいいから。やべえ。教室戻らなきゃ。」

「ね。」

- - -

今日も一日終わった。“無事”とは言えないけど・・・。でも、太陽にのこと話せてよかつたな。って思つてる自分もいる。太陽もたまにわけわからぬけど、最近自分もわけわからぬ気持ちになる事がある。

あ、太陽は私と一緒に帰るのかな。太陽は靴あつちにおいてたつけ。行つてみよう。

「・・・。」

太陽の靴が置いてある下駄箱の方に近づけば近づくほど高くて大きな声が耳に響く。

「太陽君！メアド教えて！」

「太陽君、一緒に帰らない？」

ふれあい広場みたい。私は傍観者の「」とく、つり立っていた。ん？また聞こえる。

(これじゃあつち行けねえじゃん……。)

太陽の声だ！あつち？あつちって……。どつち？太陽が私に気付けば心で聞けるんだけど……。

「つちむいて！太陽！

そつ強く思ったその時。

「あ、千歳！――」

太陽が私に気付いた……のはいいんだけど、他の女子がおもいつきり私を睨む。そんなこと気にもせず、太陽は女子の群れをかき分けてこつちにきた。

「千歳から来るとは思わなかつたな。」

「え、だつて先帰つたら感じ悪いと思つて……。とにかく早く行こつペ。」

さすがの私もあそこまで睨まれたら動じてしまつよ。

急いで走つた。あ、やつと校門。

「あのさ、太陽。女子の前では私の名前呼ばないで。」

「なんで？」

「私がすうじに田で見られるの！太陽だつて分かるでしょ？あんな露骨に睨んできたら……。」

あれ？めっちゃびっくりした顔してない？

「なんでオレが千歳の名前呼ぶといけないんだ？」

「だから…基本女子と男子は名前呼びなんてしないの。よっぽど親しくないと。だから、私と太陽が親しいと思われたら私が何されか分からぬの……。」

「千歳もオレの」と名前で呼ぶじやん。」

「太陽には苗字ないでしょ！？とにかく、うん。ダメだよ？」

「いやだ。」

はい？

「あんな奴らのせいでなんでおレが千歳を名前で呼べなくなるんだ？おかしくね？そうだ。オレはこの先もずっと千歳は千歳って呼ぶ。他の奴がなんか言つならオレを呼べ。なりいだろ？」

んー。微妙によくない氣もするけど……。そのまま言つなり。

「ま、いいか。」

私が仕方なく笑うと、太陽はすうじに一々口にしてた。

家に着いた。私がまず最初にしなきゃいけない」と。それは・・・。

「手洗いうがいだろ?」

「違います。お金のことだよ・・・。ホントにどうしよう。これから生活費が尽きて2人とも餓死しちゃつたら? ! 嫌だな。」

「いや、落ち着け?」の家は母子家庭だから手当が支給されるだろ?」

「うん。でもそれは私だけしか受け取れないから・・・。」

「なんで?」

「だつて太陽は戸籍上私の姉弟じゃないし・・・。てか、太陽に戸籍なんてあるの?」

「一応ある。けどこの世には存在しない。」

「・・・ないんじゃん。」

「この世に存在しないからってなって決めつけちゃいかんぞ。オレは空より高いとこにある星で生まれたから、そこに戸籍がある。」

「ふうん。戸籍はあるのか。でもこの、地球で、日本に戸籍がないと意味ないの。」

この後しばらく太陽と2人で、お互い無知ながらも頑張つてお金についての討論を繰り広げた。

そんな中・・・。

ピルルルルルルルルツ・・・

電話だ。また知らない人だ。

「はい。夢咲です。」

「あ・・・、千歳か？お父・・・さんじゃないんだよな。」

「お父さんでいいよ・・・。」

「やうが？いや、実は昨日、お母さんが病院に運ばれたってこと聞いてさ。お母さん、多分この後10年くらいは家に帰つてこないと考えた方がいい。それで、千歳もその家で1人で暮さなきやいけないだろ？でもまだ中学生だからお金は稼げない。だからお父さんが毎月仕送りをする。今さらお父さんなんて言えるような立場じゃないのにごめんな。けど、これくらいのことしかできないからさ。明日くらいに千歳名義の口座をつくってくれ。つくりかたは窓口で聞いてな。作つたらまた電話くれ。じゃあ。」

ツーツー・・・。

あら、一件落着しちゃつた。もつ、お父さんではない人なのに、お父さん、以外では呼べなくて。それに、家族でなくなつた今でも私のことを探してくれる。ずるいよ・・・。もつと簡単に憎めたらいいのに。大嫌いだつて。大声で言えたらいいのに。それすらできないよ・・・。

「千歳? なんだつた?」

「あ、お父さんが、お金は毎月仕送りするから口座を作りなつて。」

「まじか。じゃ、明日作りに行こひがー。」

あれ、そんなノリ? そつか。別にそんなに考え込むほどのことでもないし、お金の心配はいらなくなつて、喜ぶべきだよね。

「でも、お母さんはやっぱり、この後刑務所に入ると思う。だから明日、口座作つたら、最後にお母さんに会つてくれる。」

「うん。やうしな。」

「それで、ひとついい?」

「なに?」

「太陽もお母さんに挨拶して? 誰も太陽の存在を知らないなんて、嫌な感じだから・・・なんかうまく言えないけど、お母さんには太陽の存在をしつかり認めてほしいんだ。」

「うん。当たり前じやん。」

やつぱり優しく笑う。なんでそんな笑顔が出来るの? 私はいつも作り笑いなのに。それでも最近、太陽の前だけは自然と笑えてる気がする。私の勘違い? ま、いつか。



## Bad but mother .

次の日、学校が終わってから、直接銀行に行って口座を作った。それだけのことなのになぜか大人の階段登つた気がした。次はお母さんの病院。電車で2駅のと。

「夢咲です。」

受付の人に一言やう言つと、すぐに部屋を教えてくれた。この前とは違うとこ。お母さんあの後起きたのかな。電話とかがないから無事だつてことは分かつてゐるけど田を覚ましたかどうかは分からぬ。

205号室 夢咲様

「お母さんは入院してゐらしい。ノックして・・・。

「お母さん、入るよ。」

返事を待たずして扉を開けると・・・。お母さんが横になつてゐる。あれ、太陽?なんで入らないの?

「千歳?」

起き上がつた。

「千歳・・・。」めんなさい。」

お母さんが私に謝つた時、

(今は2人きりの方がいい。)

そう聞こえたから頷き、扉を一回閉めた。

「お母さん。私は、寂しかったんだよね。」

「ダメだ。涙が。

「本当にお母さん、許されないことしちゃつたわ。」

お母さんも泣く。

「でもね、お母さん。私、大丈夫。今独りじゃないんだ。太陽。。。入つて？」

「太陽？・・・あら・・・。」

太陽は氣まずそうに入つて來た。

「お母さん、信じられないと思つけど、この人、太陽つて言ってね、生まれた時から繋がつてたつて言つか・・・んー。なんていうのかな・・・。」

私が、うまく説明できなくて困つてると、

「前、お会いしましたよね？」

「え？お母さん？」

「はい。やっぱり見えたんですか？」

なにそれ？わけわからない。

「あの、いつだつたかな、お父さんとの離婚が決まった時くらいかしら？家に見知らぬ男の子が見えてたんだけど・・・。いつの間にかいなくなつて、太陽君だつたのか。」

「はは、千歳より先に見えるとは。」

「はは、じゃないでしょ？」

「太陽のこと知つてたの？」

「知つてたと言つたか見えたのよ。幽霊かと思つたわ。」

説明の必要なかつたね。あれ、お母さん元気じやん。いつものお母さんだ。これで一緒に・・・は無理だよね。お母さん、この後刑務所に行くんだよね。

「千歳。お母さん、ホントにいけないことしちやつたの。知つてるよね？でね、お母さん多分、この先10年くらいは刑務所出れないの。だからね、これ。」

お母さんの手に握られてたのは水色の携帯電話。私の大好きな色。

「病院に運ばれる前に急いで買ったのよ。」

「なんかやだな。それ！」

私は泣きながら笑つた。

「これでそれなりに不便はなくなるでしょ？料金とかは手当だから払つてもいいことになっちゃうけど……。」

あ、それなら……。お父さんのこととは言わなくていいか。

「お金のことなら大丈夫！お母さんは私のこと心配しないでね。それじゃ、そろそろ行くね。元気になつて帰ってきてね。」

いやだ。お母さんと離れたくない。お母さんと一緒に帰りたい。

「千歳、ごめんなさい。ありがとね。太陽君も。」

お母さんは最初から最後まで謝つてる。お母さんは悪いことをした。けど、更生できることないよね？だってお母さんだもん。大丈夫。信じよ。」

「うん。バイバイ！」

扉を閉めた。泣かない……。

ん？肩になんか……。太陽か。やめてよ。

「つ・・・、うう・・・。」

「うえ切れなかつた。でも、肩に置かれたこの手が言へ。『強がつたつて意味ない』つて。

「スッキリしたか？」

太陽が私の顔を覗き込んだ。

「ん? したけど・・・覗かないでくれないかな?」

「すいませんね。帰るか。」

「うん。」

太陽と手をつないで帰った。なんかよくわからないけど勇気が出た。

「そうだ。」

「なに?」

「太陽も携帯持とうよー! それがいいよー!」

「今から買いに行こー!」

「今から? 遅くなるよ。」

「別にいいじゃん。行くよー!」

いつもは太陽だけど、今回だけは私が手を引っ張って、ケータイシヨップに連れて行つた。

今は6時。まだ少し明るい。さすがにこの辺は人が多いな。繁華街つて言うんだつて。最近知った。私はあんまり来ないから良く分かんないけど、このケータイショップは知ってるんだ。店前に目立つ犬の模型があつて、それが大好きでお母さんと通る時はいつも触つてた。でも、入るのは初めて。

「いらっしゃいませ。」

声高いな。どこから出すの？携帯はどうやって選ぶのかな。太陽も知るわけないよね、そんなこと。

「千歳と色違いがいい。」

「え？私ど？じゃあ、これが。」

色は5色。私の持ってる水色と、ピンク、黄色、黒、白の5色。太陽の好きな色つて何だらう？太陽つて言えば赤かオレンジか黄色かな。黄色しかないや。

「黒だな。」

「うそ？」

「赤とかはあんま好きじゃねえよ？」

「そつか。じゃあ、これにしよう。」

それで、メールアドレスとか、色々、説明される通りにひつた。  
時間くらいかかった。お母さんもこんな苦労したのか。改めてあり  
がとう。あれ、お母さんにお礼言つたけ？ヤバい。言つてない。次  
会つ時に言ねり。

「今度は、い・え・に帰るか。」

「そんな強調しなくても・・・。」

2人して携帯が入った袋を引っ提げて駅まで歩いた。

電車に乗っても、帰り道を歩いても、あのケータイショップの  
店員さんが言つた言葉が気になつて頭から離れない。

「素敵な彼氏さんですね。」

誰がじや。いろんなおつわとのびーが“素敵”？！

「誰がおつわん？あー、わづかやや、Jの前学校で、千歳、オレ  
のこと褒めたよな？」

「はあ？んなわけない。モーサーだよー。」

「ふーん。ならいいけど。」

「いつ私が褒めた？ん？待てよ。あ・・・。」

「思い出したる？オレが妄想なんて・・・。甘いな。」

なんだとう？？つてか相当恥ずかしいんだけど。この人が心読める  
こと忘れてた・・・。あーそうだ。

「これでいいだ！」

「は？」

私は手に持つてたケータイショップの袋で顔を隠して、「ばあーか、  
ばあーか！」と心で思つた。

「何してんの？」

「いや、なんでも・・・。」

分かんなかつたことに「さまあみるこや！」と思つたけど、冷めた  
目で見られた」との恥ずかしさの方が勝つた。

「着いた・・・。」

もつ家か。あ、お父さん！電話電話。

ピポパッと。

「・・・お父さん？口座作つたよ。番号教えればいいの？りょつ  
と待つて。」

「えっとね、（個人情報）だよ。」

「分かつた。番号は誰にも教えちゃダメだよ？」

「分かってるので。じゃあ、よろしくお願ひします。」

そう言って電話を切った。あ、太陽お風呂入ってる・・・。私も入ったかったのに。そだ。太陽の服を買いに行かなきゃ。今までパジャマなんて何でもいいっていうからお母さんのを着せてたけど、それじゃ、あまりに不憫だよね。よし、明日行こう。

5分後

「出たよ。」

「はやいね。」

「千歳が長いんだよ。死んだかと思つたよ。」この前。

「あり得ないから・・・。」

30分後

「出たよ。」ほんにじよ。って、作るの忘れてた・・・。

「もうだらうと思つて作つておこたけど。」

わあーこれはホントにびっくりーー！

「すげえだろ？はい、ありがとは？」

「ありがとー食べいいの？！」

「いや、食わなきゃ意味ねえだろ。」

「いただきますー。やばーなにこれー！美味しいねー！」

「うん。『つま』『つまい』。さすがだな。」

「自分で壇つか。あ、そうだ。明日太陽の服を買いに行こー。」

「いいよ、そんなの。」

「よくないよー。どつかいくとき制服かパジャマかだよ？？絶対買いに行くんだから。」

「分かったけど。もう食ったの？」

「え？ うん。『うちそつさま』。太陽は男なのに遅いねえ。」

「関係ないから・・・。」

今日の洗い物は私がした。太陽が料理できるなんて知らなかつた。悔しい半分尊敬した。こういうことは顔が見えないとひるで思つことにした。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n5909z/>

---

おひさまsummer

2011年12月30日23時45分発行